

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	1175100724
法人名	NPO法人 暮らしネット・えん
事業所名	グループホームえん
所在地	埼玉県新座市石神2-1-4
自己評価作成日	令和 3年 12月 27日
評価結果市町村受理日	令和 4年 3月 30日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/11/index.php">http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/11/index.php</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	有限会社プログレ総合研究所
所在地	埼玉県さいたま市大宮区大門町3-88 逸見ビル1階
訪問調査日	令和 4年 3月 11日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

2020年3月からの新型コロナウイルス感染拡大の中、今日に至るまで、「ふだん通りの生活を守る」ことを常に考えてきた。2020年5月末からは家族との面会も、事前予約や検温などの対策付きで再開。認知症高齢者の生活の場であるとの認識から、入居者はふだんはマスクをしていない。デイホームえんと共に過ごす時間も継続してきた。それでも、スタッフによる室内や手指の消毒、入居者とスタッフ自身の体調管理等で一人の陽性者も出ていない。(2020年度末から毎週、法人内全スタッフのPCR検査実施。) 昨年度末には入居者の100歳の誕生日会を、家族も招いて行なうことができた。この入居者への聞き書き「100年インタビュー」はグループホームえんの財産となった。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

NPO暮らしネット・えんとして、グループホームを始め、訪問介護、デイスサービス、小規模多機能、配食サービスなど、地域に根ざした、様々な介護、福祉サービスを展開している。グループホームえんは、「高齢になっても、その人らしい生活を続け、この街で暮らし続けられる」ことを願って、日々の支援に努めている。コロナ禍前は、ボランティアによる、レクリエーションの企画、折り紙、習字、体操など楽しんでいた。地域の防災訓練や町内会の掃除にも参加していた。食事にも力を入れている。系列の「えんの食卓」から運ばれる食事を中心に、家庭菜園で採れる、きゅうり、那須、竹の子等が食卓を彩る。また、医療との連携においても、提携医の訪問診察を始め、薬局の居宅療養管理指導や、訪問歯科も来ている。看護師や、理学療法士が駐在していて、健康管理に努めている。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	先ごろ発行された「暮らしネット・えんの30年とこれから～タスキをつなぐ～」を全員で読んでいる。	「暮らしネット・えん」として、30年を迎え、8事業所が連携している。理念にもある高齢者の「その人らしい生活」が出来るよう支援している。例えば、庭の花を飾る、楽しい食事を提供するなど、実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の一員としての自覚は変わらず持ち続けているが、コロナ対策で交流が困難になっている。	コロナ禍前は、ボランティアによるレクリエーションの企画、庭木の手入れ、体操、折り紙、歌、言葉遊びなど多彩であった。町内会の防火訓練や掃除などにも参加していた。今は、近隣の散歩などで、交流している。	コロナ禍前は、様々な地域との交流があった。コロナ禍で、地域との交流が途絶えている。コロナ収束を見据えて、再度、地域や家族との交流をどのように深めるか、検討いただきたい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	「えん通信」「グループホームえん通信」を発行して、認知症の方たちの日常を伝えている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ対策で開催できなかった間も書面開催を続け、質問や意見に答えてきた。	コロナ禍前は、2か月に1回、管理者を始め、市役所の担当、地域包括支援センター職員、民生委員、家族、地域の有力者等が参加していた。今は、書面報告している。地域における高齢者の孤独問題なども話し合われた。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	今年度は実地指導があり、運営指針などの不備も指摘してもらって改善した。	行政からの実地指導があり、細部の指導がなされた。市の窓口、地域包括支援センターからは、受入れの相談がある。また、研修の案内もあり、参加している。新座ケアマネネットワークもあり、管理者、ケアマネジャーが出席している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	ADL低下により転倒防止のために抑制が必要な方について、話し合いを行い、市の担当者にも相談した。	身体拘束、虐待防止については、毎月話し合っている。声掛けのタイミング、夜間の離床センサーは拘束にあたるか、「座って」「ちょっと待って」などのスピーチロックについても、その都度、お互い確認して、注意合っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることのないよう注意を払い、防止に努めている	上記の方を含め、安全確保が拘束・虐待にあたらないか、常に話し合っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者と計画作成が研修に参加、若年性認知症でキーパーソンが高齢の親の方に成年後見人が必要か検討した。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	十分に時間をかけて説明し、質問してもらって理解納得を測っている。ターミナルケアについても、契約時に説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	コロナ禍でご家族とお話する機会も減ってしまっただが、短い時間でも要望や意見を聞き出せるように努めている。	コロナ禍前は、運営推進会議を中心に、家族からの意見を汲み取っていた。面会時は、よく意見を聞いて、家族との関係は良好である。また、請求書を送る際に「えん通信」を同封して、利用者の日々の生活を伝えている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ミーティングや申し送りノートで日々行っている。	年1回の法人総会を始め、月1回事業所連絡会、事業所内でのミーティングが開かれ、管理者、看護師、理学療法士、職員が参加している。日々のケアの方法、アプローチや、勤務時間など活発に、意見交換している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	把握し、日々努めている。就業規則ファイルを職員の見やすい所に置いている。健康状態や子育て・介護のための休暇に柔軟に対応している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部の研修はオンラインで参加できるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	にいがたケアネットワークでの交流などがすべて書面になり、なかなか難しい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	今年度は11月に二名の新入居の方がいた。「猫」「クラシック音楽」など好きなものを手掛かりに、安心して暮らしてもらえるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	一人はデイホームえん利用からの入居で、約一年、家族の心配ごとを共有してきた。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	二人とも、入居前の施設のケアマネジャーから必要な支援を聞き取ることができた。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者もスタッフを「選ぶ」というか、個々のスタッフに対して求めるものを変えており、対等であると感じる。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族により入居者とのかかわり方は様々であることを尊重し、今現在の入居者の生活や健康の状態を常に伝えている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で家族との面会ができない時期には、写真や通信を送ったり、電話の取次ぎをしたりした。	コロナ禍前は、自宅に戻ったり、お墓参りなど行っていた。隣接のデイサービスや近隣の小規模多機能からの入居者が多く、馴染みの仲間と交流している。また、年賀状や手紙などくれば、返信の手伝いもしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者が同士の関わり合い、支え合えるような支援に努めている	スタッフはきっかけ作りなどの黒子になり利用者同志の会話や関係を繋ぐように意識している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取り組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	今年度、入院から他施設に移った方が二人いたが、入院中から退居後の現在もお電話をいただき、様子を聞いたり心配事の相談を受けたりしている。退居者の家族がボランティアに来てくれている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	11月末新入居の方二名については、まだつかみ切れていない。会話や行動から探っている。	系列の事業所からの入居者が多く、利用者の情報は事前に把握できている。入居後は一緒に生活リズムの中で、会話を中心に願いや希望を聞き取っている。困難な場合も、表情や仕草で気持ちをつかんでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	11月末新入居の方二名についても、家族から十分にお話を伺え、お人柄や認知症発症からの経緯などの理解することが出来た。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	11月末新入居の方二名についても、特に夜勤者からの情報で排泄リズムや夜間安心して眠れているかなどを確かめている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ミーティングや日々の振り返りでの意見を参考にプランを作成している。状態変化の時はカンファレンスを開いている。	利用者の様子や状態を記載したケース記録を基に、職員各自がカンファレンスシートに困りごと、ADLの状態などを書き込んでいる。随時ミーティングを開き、看護師、理学療法士等の意見も取り入れプランを作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録やミーティングで情報を共有している。デイホームスタッフからも意見や情報をもたらしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	法人内の他事業所(デイホームえん、ケアプランえん、ケアサポートえん、多機能ホームまどか、えんの食卓、事務局)に協力してもらって取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	近隣の散歩で、庭の花や犬を見せてもらったりしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	現在、9名中6名が訪問診療と薬局の居宅療養管理指導を利用。主治医、看護師、薬剤師と情報交換している。新規入居者についても医療情報を確実に得るため、訪問診療を間もなく利用する。	月1回提携医の訪問診療がある。薬局の居宅療養管理指導も利用している。看護師や理学療法士がいて健康管理に努めており、訪問歯科もある。夜間に心配事が起こらないように日中に対応しているが、万一の場合は救急搬送している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職が週に1回、介護スタッフとして日勤で勤務しており、入居者の状態等把握している。まどかの看護師も、必要がある時は応援に来てくれている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	今年度は入院者が4名いたが、面会に行けなかったため病院側とはほぼ電話のみのやりとりになり、状態把握が難しかった。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	昨年、要介護5になった方とは話し合いを重ねてきた。特養の申し込み、入院、転院、退居について、ご家族の気持ちを尊重し、すすめることができた。堀内病院地域連携室の協力も得られた。	契約時重度化した時の対応を説明している。介護度が上がり、重度化してきたら、ケースバイケースで、事業所、家族、かかりつけ医と連携して、打合せを重ねている。事業所で、出来ること出来ないことを理解頂き、看取りもおこなっている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	法人内や近隣の消防署主催の救命救急講習がほとんど行われなかったが、看護師によるレクチャーなどで再確認した。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	2018年度に「臨時的福祉避難所準備会」を立ち上げ、法人全体で防災に取り組んでいる。グループホームの入居者は避難が難しいので、施設内で安全な生活が継続できるよう物品を揃えている。	避難訓練は年2回行い、うち1回は消防署の立ち合いがある。併設のデイサービスと合同で実施し、法人全体で地域の避難場所として防災に取り組んでいる。非常用の飲料水、乾パン、簡易トイレなど備蓄されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入浴やトイレの介助は特に、同性介助にしたり、トイレ内に準備してある個人のリハビリパンツやパッド類が特定できない工夫をしている。	個人情報管理について、書類は事務室の見えないところに保管、パソコンはパスワード管理をしている。入浴、トイレなどでは、ドア閉めを励行、同姓介助としている。人格を否定するような言葉かけはない。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	先回りしないで待つことを心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	例として、食事の時間や場所も、安全が確保できてリズムが崩れない程度なら、ご本人の希望に沿っている。「起きたくない」「部屋で食べたい」など		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	在宅時に着ていた服を着てもらっている。コロナ禍のため今まで来てくれていた理容ボラがお休みとなり、散髪の得意なスタッフがやっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	法人内に「えんの食卓」という配食事業所があり、食の嗜好には協力を得て対応している。「えんの食卓」が休みの日曜はリクエストを聞いたり、「お楽しみ」的な献立にしたりしている。	「えんの食卓」というグループの配食サービスがある。朝食は、職員が作り、出来る人は、盛り付け、味見などしている。ボランティアが作る家庭菜園があり、竹の子、きゅうり、茄子等、季節の物が、食卓を飾る。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食が細い方や嚥下困難な方、透析治療の方などいるが、「えんの食卓」の協力も得て各々に応じた量や状態にしている。補助食品などは近隣の福祉用具店にも相談している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	現在の入居者は、歯みがきについては全員自立だが必要に応じて声掛けをし、時には口腔内を見せてもらっている。心配な方は歯科医に往診してもらう。その際、衛生士からの口腔ケア指導も受けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	各々の排泄リズムと自立度に応じ、「二時間おき」～「一日一回」など個々に対応している。	排泄チェック表はないが、職員が、個々の排泄リズムを把握していて、随時トイレ誘導している。夜間は、職員がトイレ誘導したり、パッドの交換をおこなっている。退院後はオムツを外し、トイレでの排泄の支援をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事は野菜やきのこ類が多いものだが、医師や看護師と相談して、自然な排便を助ける程度の緩下剤を使用している方がほとんど。看護スタッフがお腹の張りや肛門の確認を適宜行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	時間や曜日はどうしてもスタッフの都合によってしまうが、入浴時にはゆったり過ごしてもらえよう、湯温に気を付けたり、湯につかりながらのおしゃべりを楽しんだりしている。	隣接のデイサービスと共用の入浴である。概ね午後の時間帯に、1日2～3人、ゆっくり入浴している。入浴嫌いな人もいるが、あの手この手で誘っている。職員と2人だけの時間で、いろんな話をして、楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝・起床の時間を把握し、その方に合った声掛けや誘導、室温にしている。特に季節の変わり目には好みの寝具の温かさに気を配る。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬を受け取る時には管理薬剤師と情報の共有をしている。居宅療養管理指導報告書に目を通している。処方の変更や臨時薬については申し送りで共有する。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活歴や趣味・特技を理解することで会話を引き出し、現在その方ができることを把握して共に家事をおこなっている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出については昨年3月からのコロナ対策で小規模なものになっている。近隣の散歩や、車から降りないドライブなどの工夫をしている。	コロナ禍前は、日課の近隣散歩に始まり、春は、花見、紫陽花、そして秋の紅葉などを楽しんでいた。個別に要望があれば、コンビニエンスストアにおやつを買いに行ったり、駅前の化粧品店に行く支援もしていた。今は、散歩や、庭のテラスでの外気浴を楽しんでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	手持ちの小銭を出してきて「これで〇〇を買ってきてほしい」という方もいる。尊重している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	お孫さんからのプレゼントを身に着けた入居者が写真に添えて手紙を書いたりしている。携帯電話所持の方一名については、通話などのお手伝いをしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	庭に咲いた季節の花や、スタッフの切り絵や折り紙の作品を飾ったりしている。	1階には、デイサービスと共用の食堂があり、2階に南向きのリビングと居室がある。エアコン、加湿器、そして足元を温める温風ヒーターがある。壁には、季節を感じる切絵や、利用者が書いた習字、庭に咲く花、採れたての野菜、果物などが飾られている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	三時のお茶の時間に、あえてリビングではなく廊下で一人またはスタッフと二人で過ごしたり。食堂の席は、定位置ではないと嫌な方、いろいろな席に座りたい方。それぞれを尊重している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	新入居者はお二人とも、ご家族が本人の趣味を尊重して、とても素敵な部屋作りをした。各自の部屋の表札はスタッフの手作り。	仮住まい感覚の簡素な居室には、在宅で馴染んだダンス、家族の写真、テレビ、仏壇、趣味の絵の道具などを持ち込んでいる人もいる。掃除は、職員が行うが、出来る人は、自分でおこなっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	あえて死角のある設計となっており、スタッフは「見張でない見守り」の工夫をしている。		